

就職難は一様にあらず

経済を活性化させ、国民が元気になるためには、雇用を活性化するのがもっとも効果的である。逆に言えば、雇用が活性化しない限り、国民が本当の意味で元気になることはない。経済の復活を前面に出して様々な政策に取り組み安倍晋三政権にとっても、雇用は最重要分野の一つといつてよいだろう。

雇用を活性化するために鍵となるのは、今の日本の雇用制度が時代の変化に対応していないということだ。人生のライフサイクルの中で、様々な世代が直面している

伊藤 元重

機構大教授
開発大教授
研究員
合研長
総理事

問題を考えてみれば明らかだ。若者は大学を卒業してもなかなか仕事がなく困っている。企業が求める人材と、学生の資質の間に大きなギャップがあるようだ。

学校を出たときに正規の仕事につけないと、その後アルバイトや派遣など非正規の仕事にしかつけないことが多い。中には仕事につ

けない。40歳ぐらいの壮年期になって、今の会社で能力を発揮することができない人、あるいは会社から解雇された人は、次の仕事を見つけない。会社を移るさいに求められるスキルの習得が簡単ではないのだ。60代になって退職や定年を迎え

時代に合わない雇用制度

けずにニートになってしまつ人もいる。若いときに就職に躓くと一生苦労することにもなりかねない。

子育てや親の介護を抱えている人は、なかなかよい仕事に就きにくい。子育てが一段落した女性が、職場に復帰するのも簡単なことで

たシニア層も、その多くはまだ働く意欲は強い。年金だけでは老後の生活が不安だ。そこで新しい仕事を探そうとするが、そう簡単に見つからない。

このように見ると、雇用の問題は人によってきわめて多様な形をとることが分かる。それぞれの状

況にあった多様な対応が必要だ。若者の雇用を支援するためには、企業が求めるスキルを大学や専門学校で学べるように、教育の仕組みを見直す必要があるだろう。

世代ごとの対応も必要

女性の職場復帰を支援するためには、保育所を充実して子育て支

援を強化したり、あるいは介護の支援も強化したりする必要がある。子育て支援や介護が、現役の労働者を助ける形にならなくてはいけない。

壮年期の転職を円滑にするためには、その時期にもう一度学び直せるような仕組みを構築することが重要だろう。海外では、地域の大学や専門学校で短期のコースを習得することで、新たなスキルを

身につけて仕事を見つけるケースも多い。

シニアの人が仕事を見つけるのは容易ではないようだ。ここでも仕事を斡旋する仕組みを強化するとともに、企業にもシニアに働きやすいような勤務形態の仕事を増やすように働きかける必要がある。

トルストイの小説のアンナカレーニナの冒頭に次のような有名な書き出しがある。幸福な家庭は皆同じように似ているが、不幸な家庭はそれぞれにその不幸の様を異にしているのだといつもものだ。雇用においても同じような面がある。一概に雇用問題といっても、世代などによってその内容は多様である。こうした点を認識したきめ細やかな対応が求められる。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。